



浄恩寺 雅楽葬 検索

浄恩寺同朋会報

電話 052-881-8474

号外 沖繩タイムス 2017年8月12日 6月12日

大田昌秀元知事 死去

過重な基地負担拒否 92歳「平和の礎」建設



大田昌秀元知事は、92歳で死去した。生前、沖縄の米軍基地負担をめぐって、平和の礎の建設を推進した。...



私は、「沖縄を通して日本の民主主義の成熟度が測れる」と訴えてきました。しかし、本土の人々には負担と責任を負う気がない。自らの平和と安全の犠牲となっている他の人を顧みないのか。人間らしい生き方とは言えないのではないですか。

大田昌秀

沖繩の戦後は、米軍基地の問題がある限り終わることではない。沖繩県知事が訴え続けた太田昌秀（おおた・まさひで）元知事は、戦後の日本の平和と繁栄を考へる時に、沖繩の苛烈な歴史とその果たした役割を考えずにはいられません。自身の戦争体験から、平和への思いは強く、知事時代の功績に特筆されるべき「平和の礎（いしじ）」は、人々の心を強く打つ太田氏自身の平和を希求する不屈の魂を感じる事が出来るのではないのでしょうか。



八月を迎えるたびに、どうも向き合わなければならぬ歴史があります。これら限られた問題として捉えられない、平和は私たちの命に限り、私たちがこのことを考えさせていた。この詩がここにありませう。

「慟哭（どうこく）」

大平数子

逝ったひととはかえってこれないから
逝ったひととは叫ぶことが出来ないから
逝ったひととはなげくすがないから
生きのこったひととはどうすればいい
生きのこったひととはなにがわかればいい
生きのこったひととはなみをちぎってあるく
生きのこったひととは思い出を凍らせてあるく
固定した面（マスク）を抱いてあるく

ヒロシマの長編詩として知られる「慟哭（どうこく）」はこの詩から始まる。大平さんは、出産を控えた長男を連れて帰った爆心地から二・五キロの己斐町（西区）の自宅で、二十二歳のとき、昇さん（30）を翌年に失った。その内、四歳だった長男とも別れることになった。その年、四歳だった長男とも別れることになった。その年、四歳だった長男とも別れることになった。...

叔母の先生をいまして、実家に戻されて、小学校の先生をいまして、高石さんが見舞うと入院は爆四年後のこと。高石さんが見舞うと夜が長い」と、集めた紙切れに詩を書いてきた。病の中からは生まれたい。



